

セラミック九州

CERAMIC KYUSHU

佐賀県立九州陶磁文化館報
Kyushu Ceramic Museum News Letter

No.59

編集・発行 佐賀県立九州陶磁文化館

発行年月日 令和5年(2023) 3月20日

〒844-8585 佐賀県西松浦郡有田町戸杓乙3100-1

TEL. 0955-43-3681 FAX. 0955-43-3324

<https://saga-museum.jp/ceramic/>

E-mail: kyuto@pref.saga.lg.jp



《色絵花鳥文六角壺》

ひぜん ありた なんがわらやま
肥前 有田 南川原山

1670～1690年代

佐賀県立九州陶磁文化館 所蔵

佐賀県重要文化財（工芸品）

令和4年4月28日指定

そめつけ にごしで きじ
染付を用いず濁手素地に余白を生かした構図で繊
細な線描きの絵付は、日本独自の色絵磁器を完成さ
せた典型的な柿右衛門様式の特徴を表します。精巧
な板作り成形による六角壺はヨーロッパ向けの優品
にみられ、年代基準資料であるイギリスのメアリー
2世（1662-1694年）コレクション（ハンプトン・
コート宮殿）の類例として学術的な観点からも重要
です。また、金属加工が施された揃いの2口セット
での伝世品は、ヨーロッパの室内装飾品として受容
された東洋陶磁の歴史背景を物語り、海外の王侯貴
族を魅了した肥前磁器を象徴する貴重な作例といえ
ます。

～令和5年度の展覧会～

企 画 展

なんて書いてあると？ —お皿の裏話—

江戸時代のやきものには、お皿の裏に文字やマークが書かれていることがあります。この文字やマークのことを「銘（めい）」と呼んでいます。

銘には様々な種類があり、中国の磁器に書かれた銘をまねてまるで中国で作られたかのように書かれた文字や、何だか分からない不思議なマークなど、バラエティーに富んでいます。一般的に使われた銘もあれば、特定の窯でのみ使われた銘もあります。

一言では表せない奥深い銘の世界を、館蔵品を使って分かりやすく紹介します。

- 主 催 佐賀県立九州陶磁文化館
- 会 場 佐賀県立九州陶磁文化館
第4・5展示室
- 会 期 令和5年（2023）9月30日（土）～
11月26日（日）50日間
- 休 館 日 月曜日
※10月9日（月・祝）は開館し、
翌日休館
- 観 覧 料 無料
- 展示作品 約100点



色絵樹木石畳文小皿
肥前 有田 1640～1650年代
九州陶磁文化館所蔵
柴澤コレクション

右の作品のうち、上は有田の磁器、下は中国の磁器です。どちらにも裏に「銘」があり、「大明成化年製」と書かれています。中国明王朝の成化（1465～1487）という年号の時に作られたという意味で、有田の磁器によく使われています。有田の磁器が当てはまらないことはもちろんですが、実は中国の磁器も製作年代より古い年号を使っているのです。

有田の磁器は基本的には同時代の中国の磁器をモデルにしているため、このような中国の古い年号が銘として使用されました。



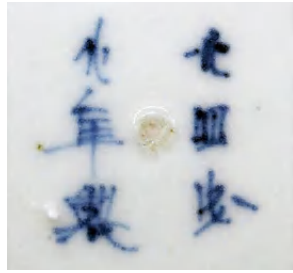
染付鹿鶴松文皿
中国 景德鎮 1610～1620年代
九州陶磁文化館所蔵
柴澤コレクション

肥前の磁器 銘のいろいろ

中国の年号を書いた銘



「大明」



「大明成化年製」



「大明成」



「化年製」



「大明永樂年製」



「大明萬曆年製」



「太明年製」

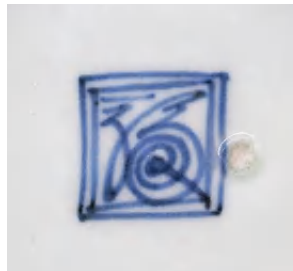


「大明年製」

吉祥を表す銘



「福」



「渦福」



「富貴長春」



「奇玉宝鼎之珍」

合字やマーク



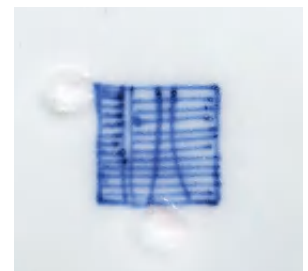
「寿福」



「百の増画字」



(通称)「古へ人」



「印章形の不明字」



「丁子」※



「丁子花」



「花」



「折枝桃」

※「丁子」とはクローブのことであり、香りの良い丁子の蕾を乾燥させたものを表しています。貴重な薬用や香料として宝文の一つに数えられるものです。

～令和4年度企画展の報告～

リニューアル記念 特別企画展

海を渡った古伊万里

～ウィーン、ロースドルフ城の悲劇～

オーストリアのウィーン近郊にたたずむ古城ロースドルフ城では、城主ピアッティ家により古伊万里を中心とした陶磁器が多数コレクションされ、城内を美しく飾る調度品として大切に伝えられてきました。

ところが、第二次世界大戦の戦禍によりその多くが破壊されてしまいました。ピアッティ家はそうした悲劇により破壊された陶片を破棄せず、城内の一室に陶片を集め、平和への願いも込めてインスタレーション展示を行い一般公開してきました。

本展は、国内にある古伊万里の名品とともに、破壊された陶片を含むロースドルフ城所蔵の日本、中国、西洋の陶磁器コレクションを海外において初公開したものです。日本の修復技術による復元作品も展示し「再生」にも焦点を当て、波乱に富んだロースドルフ城コレクションの全貌を紹介しました。

会期中には城主のガブリエル・ピアッティ氏も来日し、記念シンポジウムが開催されて、佐賀大学や有田工業高等学校の学生達と有田焼の未来に向けた意見交換も行われました。

- 主 催 佐賀県立九州陶磁文化館
- 特別協力 ロースドルフ城ピアッティ家
一般社団法人古伊万里再生プロジェクト
- 企画協力 株式会社キュレイターズ
- 会 場 佐賀県立九州陶磁文化館
第3～5展示室
- 会 期 令和4年(2022) 5月28日(土)～7月18日(月・祝)
45日間
- 休 館 日 月曜日(7月18日は開館)
- 出 品 数 192件833点(陶片等は含まず)
- 観 覧 料 一般600円(500円)
大学生300円(200円)
*()内は20名以上の団体料金 高校生以下及び
障害者手帳又は指定難病受給者証等をお持ちの方
とその介助者(1名)は無料
- イベント ①記念講演会「ロースドルフ城所蔵の陶磁器が語る物語」講師：荒川正明氏(学習院大学教授・本展監修者)
日時：6月18日(土曜日)
会場：九州陶磁文化館 講堂
参加費：無料
②特別対談「『破壊』から再生へ～蘇った陶片たち」
講師：繭山浩司氏(修復家)・荒川正明氏
日時：6月19日(日曜日) 13:30～15:00
③ギャラリー・トーク
日時：会期中の毎週土曜日 14:00から1時間程度
(6月18日を除く)
- 展示構成
 - ・第Ⅰ部 日本磁器誕生の地ー有田
 - ・第Ⅱ部 海を渡った古伊万里の悲劇ーウィーン、ロースドルフ城



展示風景



展示風景

～令和4年度特別企画展の報告～

特別企画展

日本工芸会 陶芸部会50周年記念

「未来へつなぐ陶芸 – 伝統工芸のチカラ」

日本工芸会陶芸部会設立50周年を記念し、伝統陶芸を支えてきた日本工芸会陶芸部会の活動を振り返りつつ、さらにはこれからの伝統陶芸の歩みを考える機会として、伝統工芸の粋を紹介する展覧会を開催しました。伝統とわざを重んじながら作陶に精魂をこめている全国各地の陶芸家の代表作を展示し、歴代の人間国宝の名品から新進作家の最新作まで137名の作家による代表作品139点を3部構成で紹介しました。会場で上映した人間国宝である井上萬二氏の貴重な記録映像（1969年アメリカ合衆国ペンシルバニア州立大学にて撮影）も好評でした。

監修者である唐澤昌弘氏（国立工芸館館長）による記念講演会では、日本工芸会の発足から陶芸部会の活動の歴史、現在注目される新進気鋭の陶芸家の取組について解説いただき、わざの継承と未来への展開について理解を深めることができました。また、作品を出展している九州の陶芸家によるトークショーや展示室でのアーティストトークを開催し、陶芸家の作陶への思いや技法について直に聞く貴重な機会となりました。世代を超えた多くの陶芸作品を観ることで、伝統性を志向する陶芸家が守りつないでいるもの、新しく創り出してきたものを感じることができ、好評のうちに終了しました。

なお、この展覧会は令和5年夏まで全国巡回する予定です。

○主 催 佐賀県立九州陶磁文化館 公益財団法人日本工芸会 NHKエンタープライズ九州

○会 場 佐賀県立九州陶磁文化館 第3～5展示室

○会 期 令和4年（2022）9月23日（金）～12月4日（日）63日間

○休 館 日 月曜日 ただし10月10日は開館し、10月11日休館、11月21日は開館

○観 覧 料 一般600円（500円）大学生300円（200円）

*（ ）内は20名以上の団体料金 高校生以下及び障害者手帳又は
指定難病受給者証等をお持ちの方とその介助者（1名）は無料

○出 品 数 陶芸家137名の代表作品139点（人間国宝37名の38点を含む）

○展示構成 I 章 伝統工芸（陶芸）の確立

II 章 伝統工芸（陶芸）のわざと美

III 章 未来へつなぐ伝統工芸（陶芸）

○監 修 国立工芸館館長 唐澤昌弘



アーティストトーク
（江口勝美氏）



国立工芸館長 唐澤昌弘氏による記念講演会「日本の伝統陶芸のあゆみと未来」



トークショー「新たな陶芸の美を求めて」
（左より福島善三氏
津金日人夢氏 中村清吾氏）



トークショー「三右衛門大いに語る」
（左より中里太郎右衛門氏
今泉今右衛門氏 酒井田柿右衛門氏）



展示風景



展示風景

調査ノート

タイにおける肥前陶磁の特徴

大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館 名誉顧問）

インドシナ半島のタイ王国は1350年から1767年にかけてはアユタヤ王朝の時代であった。そのうち16世紀末から17世紀に全盛期を迎え、日本の朱印船貿易時代がこの期間の中にある。当時、シャムと呼ばれ、王都アユタヤはヨーロッパ諸国やインド、中国、日本人が居住する国際都市として発展した。朱印船貿易時代には日本人町ができ、特に山田長政が有名であるが、1630年（寛永7）に王位継承の内紛に巻き込まれて死ぬと、間もなくして日本人町は焼き討ちされた。その後、日本人町は復興するが、日本の鎖国によってアユタヤの日本人はオランダ商館の貿易活動の中に組み込まれていた。

肥前陶磁がタイに輸出されたのは朱印船貿易の時代ではない。1644年、中国の王朝交替に伴う内乱で中国磁器の輸出が激減した後のことである。我が国は鎖国したので中国船とオランダ船だけが運ぶことができたのである。オランダの記録により、最初の肥前磁器の輸出の可能性のある1647年シャム経由カンボジア行きの中国船が肥前磁器を運んだと推測される（山脇1988）。この段階と明らかな肥前磁器はタイでは未発見である。インドネシアとベトナムで発見されている。次の1650年代になると肥前で東南アジア向けといえる磁器生産が始まり、代表的なものに「日字鳳凰文皿」がある。タイでは未発見であり、主にベトナムで発見されている。肥前陶磁が確実にタイで出土するのは1650年代の肥前磁器からであり、1990年に当館の展覧会に出品されたアユタヤ王宮出土の染付花文小瓶がある。かなり特殊なものである。しかし、盛んに運ばれるようになるのは1660年代のものであり、オランダ商館の記録によると肥前磁器のシャムへの輸出量は

1666年の1790個が最高であり、1677年（延宝5）に318個を送って、その後は絶えたという。もちろんこれはオランダによるものであり、別に中国船による輸送量がある。

そして、オランダの記録（フォルカー 1982）の中で、1664年6月、長崎からアモイに向かった小さなジャンク船が悪天候のためにやむなく「多くの日本製の粗製磁器」を海に投げ込んだ、とあり、続く記述からシャムのジャンク船であり、琉球諸島で沈没したことがわかる。それに当たるのが鹿児島県吹上浜に打ち上げられた3000点以上の肥前磁器と考えられる。それに類似する染付荒磯文碗（図1・3・4・6）がアユタヤのチャオプラヤ川引き上げ資料（九州陶磁文化館1990）の75点に含まれているので、1660年代に多く入り始めたことが推測できる。しかし、アユタヤの川引き上げ資料にも、新旧の荒磯文碗がみられる。1660年代の可能性が高いもの（29点）と1670年代頃のタイプ（18点）である。新しいタイプには吹上浜資料には1点（図5）とわずかであった荒磯文碗の一種である見込龍頭文碗（図6）が多い。川引き上げ資料には、碗以外では蓋付鉢（図7左）が4点含まれていた。一方、アユタヤ王宮出土品では染付蓋物の蓋とともに色絵の蓋付鉢の蓋と合子蓋がある。染付ケンディの注口が1点みられた。特殊なものとして、1670～1680年代と推測される板作りの角瓶で底面にオランダ東インド会社の略称VOCを呉須書きしたものが8点出土している。類例はオランダ・アムステルダム国立博物館所蔵の木箱入りの9点セット（井垣1977）があり、会社の幹部が旅行の時、携帯するリキュール入れという。おそらく、オランダの会社からの贈答で王宮に入ったものと推測される。



図1 アユタヤ川引き上げ資料
1655～1660年代



図2 鹿児島吹上浜採集
1664年遭難船資料



図3 アユタヤ川引き上げ資料 1670年代頃



図4 アユタヤ川引き上げ資料
1655～1660年代



図5 鹿児島吹上浜採集
1664年遭難船資料



図6 アユタヤ川引き上げ資料
1670年代頃



図7 アユタヤ川引き
上げ資料 1660
～1670年代

南部のナコン・シ・タマラでは、周辺遺跡出土という染付の牡丹唐草文小壺があり、1650～1660年代と推測されるものであり、類例はラオス・ヴィエンチャンで、染付と、染付素地の一部に赤絵を加えたものが出土している。この種の小壺はタイやカンボジア、ラオスでみられ、噛みたばこの石灰入れと推測される。また、ナコン・シ・タマラで肥前陶器の二彩手大皿が1点出土している。同類はインドネシアやラオスなどでも出土している。内陸国ラオスへの輸送ルートを考えて、タイ・ルートも検討する根拠である。

タイではアユタヤに次いで肥前陶磁が出土した遺跡はアユタヤの北にあるロップリである。ロップリはナーラーイ王（在位1656～1688）が第2の都として城塞都市化したという。ここでは報告書の写真で見える限りであるが、染付芙蓉手皿が1点ある。1660～1680年代のものとみられる。染付蓋付鉢の蓋が5点ほどあるが、以上は中国磁器と誤って報告されているものである。肥前陶磁として報告されているものに、色絵の蓋付鉢とみられるもの、染付牡丹唐草文蓋付鉢、染付龍文鉢など1660年代中心のものである。また、染付桐文や芙

蓉手の小碗もある。染付草花文碗や染付唐草文鉢とみられるものもみられる。これらは1660～1670年代と推測される。染付ケンディは1670～1690年代の可能性が高い。見込荒磯文碗は1670～1680年代の最後の時期のものがみられ、見込龍頭文碗も同時期とみられるものが主である。

ナーラーイ王が1656年に王位に着くと、対日貿易の拡大に努め、1661年以降はシャム国王船が1677年にかけて繰り返し長崎に派遣されている（石井・吉川1987）。1679年（延宝7）を過ぎると規則的に、ほぼ毎年シャム船が1710年まで来航することが記録からわかる。ただし、1682年長崎を出港するシャム船の積荷には陶磁器は記録されていない。よって、タイでみられる肥前陶磁器の内容からも、肥前陶磁のタイへの輸出は1660～1670年代までが主であった可能性が高い。

今回、2022年12月に佐賀県とタイとの交流事業の一環でバンコク国立博物館にて開催された展覧会「日本とタイの陶磁器交流」の講演会で約30年ぶりにタイを訪れ、バンコクの西にあるラーチャブリ国立博物館を訪ねることができた。その展示室で、今まで見てきた意匠とは異なる染付碗と小壺を発見した。ワット・マハタート寺出土品であるが、染付碗（図8）は外面の区画文様が中国景德鎮の芙蓉手などの影響とみられる。特にハッチャージャンク（1643～1646）沈没船引き上げ資料の壺の肩の文様が枠と幾何学文を組み合わせる点で似通っている。類似の染付碗が有田町長吉谷窯で出土している（図9）。窓内に風景文を描いている点も似通って

いる。月や柳を描く風景文も長吉谷窯の碗にみられる（図10）。もう1点は染付小壺である（図11・12）。例のない算盤玉形の小壺である。形は異例であるが、小壺という点で、前述のように噛みタバこの石灰入れの用途かと思われる。素地と文様から肥前磁器と推測できる。頸部際に鋸歯状蓮弁文帯をめぐらし、肩は花唐草の連続文をめぐらす。こうした花唐草の連続文は有田の1660～1680年代頃にわずかにみられる。

以上のように、タイでの肥前陶磁器をみると、磁器の食器に限っては、圧倒的に碗中心であり、小皿の例をみないのが特徴である。1708年（宝永5）の西川如見『増補華夷通商考』には朝鮮、琉球、大宛（台湾）、東京（トンキン、ベトナムのハノイ周辺）、交趾（コーチ、ベトナム中部）の5国をあげ、共通の特質の一つとして、中国の影響が強く、「何も箸を取りて食す」をあげている。そのほかの国は「何も箸を用いず手づかみに食す」とすでに指摘している。よってタイは箸を用いず、手づかみで食事をするのが、ベトナムとは異なり小皿がない理由と推測している。蓋付鉢の用途は不明であるが、小壺は噛みタバこの石灰入れと推測している。こうした生活文化の違いにもとづく器種がタイに輸出された。年代は中国磁器の輸出が激減した1660～1670年代頃に中心があることなどがわかる。中国の内乱が終わり、清朝が展海令を発布する1684年以降は再び中国磁器がタイにも流通することになり、タイにおける肥前陶磁器の流通は見られなくなるのである。



図8 染付碗 1660年代頃
ワットマハタート（寺）出土
ラーチャブリ国立博物館所蔵



図9 染付碗 1660年代頃
有田町長吉谷窯跡出土
有田町教育委員会所蔵



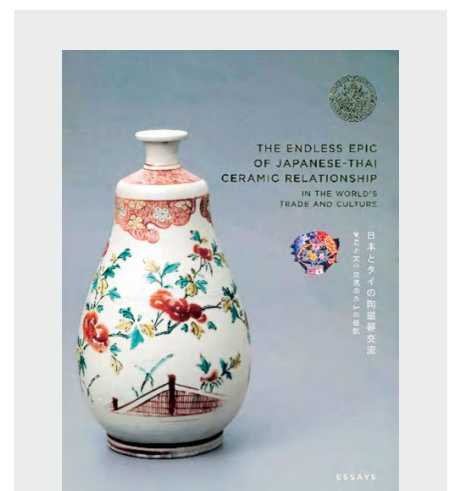
図10 染付碗 1660年代頃
有田町長吉谷窯跡出土
有田町教育委員会所蔵



図11 染付碗・染付小壺（右上・左下）
ラーチャブリ国立博物館所蔵



図12 染付小壺
1660～1670年代
ワットマハタート（寺）出土
ラーチャブリ国立博物館所蔵



展覧会「日本とタイの陶磁器交流
—貿易と文化交流の永遠の伝説—」

主催：タイ文化省芸術局
会場：バンコク国立博物館
会期：令和4年9月4日～12月14日

図出典

- 1～7 佐賀県立九州陶磁文化館1990より転載
- 8・12 徳永貞紹撮影
- 9～11 大橋康二撮影

参考文献

- 石井米雄・吉川利治1987『日・タイ交流六〇〇年史』講談社
- 佐賀県立九州陶磁文化館1990『海を渡った肥前のやきもの展』
- 井垣春雄1977『古伊万里の年代考証』陶説292
- 山脇悌二郎1988『貿易篇』『有田町史商業編Ⅰ』有田町史編纂委員会

肥前陶磁の見どころシリーズ（4）

広東形碗の焼成方法

ー江戸時代後期における肥前磁器の地方窯との競争と発展ー

（佐賀県立九州陶磁文化館 学芸員 山本文子）

肥前磁器は江戸後期になると、地方窯との競争にさらされました。より付加価値を高め、市場で棲み分けるため、肥前全体で品質の底上げと窯場同士の棲み分けを図ります（注1）。

有田では主力製品であった飯碗のデザインの刷新を図り、1780年代から19世紀前半にかけて広東形碗（図1）を生産しました。高台が大きく高く、朝顔形に開いた器形が特徴です。文様には梵字や火焰宝珠文、靈芝文など当時の流行最先端であった清朝磁器の影響を受けた文様がみられます。（注2）。この広東形碗の中には、窯道具の足付ハマ（図2）の溶着痕がみられるものがあります（図3・注3）。

足付ハマは焼成時に使う窯道具で、磁器生産では広東形碗の時代から普及します（注4）。有田磁器に使われた足付ハマは型で成形され、円錐部分に磁器土を押し込み、次いで円板部に耐火粘土を押し込んで成形します。この足付ハマを碗や鉢などの内底部に据えて上に製品を重ね積みします。狭い面積で沢山の製品を焼成することができますが、焼き上がり後、下の製品の円錐部に足付ハマの円錐形の先端部の溶着痕が3～4個、ハリ支えの目跡のように残ります。このような窯傷から、その製品が量産品として重ね積みで生産されたことが分かります。

なお、有田で生産された広東形碗の多くは重ね積みせず、足付ハマの出土例も少ないのが特徴です。例外的に足付ハマの出土例が多いのは、量産品に特化した広瀬向窯です。しかし、広瀬向窯でも品質の向上する19世紀初頭以降には見られなくなっていく（注5）。

肥前磁器の窯場の中でも量産品に特化した波佐見では、有田と同時代に広東形碗を生産しましたが、足付ハマは磁器製の特殊なものしか見られず、波佐見全体でも数点しか出土していません。その代わり、波佐見の量産品は製品の円底部の釉薬を蛇目状に剥ぎ取りを行って直接重ね積みし、精製品は重ね積みの上に置かれることがあります。そして、波佐見の広東形碗にも見込蛇目釉剥ぎがあまり見られません。（注6）。

以上のように、窯詰め方法の違いは窯場の製品によって異なり、コストにも反映されます。江戸後期に輸送費の高い肥前の磁器が全国で地方窯と競争する中、有田の内山で付加価値のある新しい器を生み出す一方、周辺の窯場で製品ランクごとに生産方法を工夫し

て巧みに棲み分けを行い、需要層を広く取り込んだ様子が分かるのです。



図1 広東形碗
肥前 有田
1780～1810年代
九州陶磁文化館所蔵
柴田夫妻コレクション



図2 足付ハマ
広瀬向窯跡出土
九州陶磁文化館所蔵



図3 足付ハマの溶着痕
広瀬向窯跡出土
九州陶磁文化館所蔵

謝辞

本稿の執筆にあたり次の方々に御教示いただきました。

赤松和佳 大橋康二 中野雄二 村上伸之（敬称略）

注1 「皿山代官旧記」文化6（1809）年には、外山に上質な陶石が混入しないように番人に念を押す記載がみられ（有田町1985）、『肥前陶磁史考』には文化12（1815）年に窯場の製品種別制度を設けたことが記録されている（中島1936）。

注2 当時清朝磁器の輸出港であった広東という名前からも清朝磁器の影響であると推測されている（大橋1996）

注3 大橋1990

注4 肥前で足付ハマは18世紀前半～中頃の陶器にみられるようになるが、磁器に用いられるのは1780年代から19世紀前半にかけて生産された広東形碗以降である（大橋2004）。

注5 有田町教育委員会2009

注6 中野雄二氏の御教示による

参考文献

有田町史編纂委員会1985『有田町史陶業編Ⅰ』有田町

有田町教育委員会2009『広瀬向窯跡』

大橋康二1990『肥前陶磁の変遷と流通』『江戸のくらし』新宿区教育委員会

大橋康二1996『肥前磁器の交流諸問題』『東洋陶磁』25

大橋康二2004『肥前陶磁器研究の現状と課題』『七隈史学』5

中島浩氣1936『肥前陶磁史考』

山本文子2022『江戸後期における肥前陶磁器生産の様相』『関西近世考古学研究』28